



あらかわ さら
荒川 紗良さん

●北中学校 3年

自分の将来

私の将来の夢は、調理師になって自分のお店をもつことです。

私は小学生の頃から料理をすることが好きで、母が仕事で遅くなる時は、私が夕食などを作りました。私が作った料理を弟や妹がとても美味しそうに食べてくれ、「おいしい。またこの料理作って」と言ってくれると、私はすごく嬉しくなります。

料理は人を幸せな気持ちにする、大きな力のあるものだと思います。だから私も、たくさんの人を幸せにする、調理師になりたいのです。



市長からの

メッセージ



青葉若葉のさわやかな季節となりました。私は早朝、近所を散歩するのを日課としておりますが、日々、温かくなり、木々の緑が濃くなっていくのを感じています。

先月から市内各地では春祭りが開催されています。また、今日10日には「くずうフェスタ」があくとプラザ周辺を中心に開催されます。さまざまな催しが行われておりますので、新緑の中、お出かけになってはいかがでしょうか。

先月6日には、今まで駅前にあった「さのまるの家」が移転し、再開しました。売場面積も広くなり商品も増え、オープン時には多くのファンの皆さんが駆けつけてくれました。今後はこの新しい「さのまるの家」から、佐野の元気を発信してまいりますので、皆さんぜひお越しください。

さて、今日6日から、東アジア太平洋地域女子クリケット選手権大会が、海外から5カ国の選手が参加し、田沼高校跡地などを会場として開催されます。また、今日10日、11日、17日の3日間、石井琢朗杯選抜中学野球佐野大会が、関東・東北の24チームが参加して、佐野市運動公園野球場などで開催されます。

本市は「スポーツ立市」をリーディングプロジェクトに位置付けております。このような大会を通じ、スポーツ立市の基本施策である人々の交流を促進するスポーツツーリズムの推進を図り、積極的に佐野市をPRしてまいります。

新庁舎建設も順調に進捗しております。現在は基礎となる部分の工事を行っておりますが、周囲の仮囲いから内部をご覧いただけるようになっております。新庁舎は市民の皆さんの生命・財産を守る防災の拠点でございます。ぜひご覧いただきたいと思っております。

岡部 正英

今回の表紙「さのまるの家移転オープン」4月6日（高砂町）



「さのまるの家」が広さが3倍、商品が2倍になって移転オープンしました。

さのまるグッズなどが並ぶのはもちろん、写真や皆さんからいただいたプレゼントなどを展示しています。土曜・日曜を中心にさのまるが出演。ファンの皆さんが交流できる憩いの場として、お気軽にお立ち寄りください。

キラリ★ 話題の「ひと」

ゆきえ 中村 由喜江さん (富岡町)

○プロフィール
佐野市女性バレーボール協会会長
バレーボールの普及活動に長年取り組む。



バレーボール人生

「女性バレーボール協会」と聞くと難しく聞こえてしまいますが、ママさんバレーのことです。

協会は、昭和53年に発足しました。翌々年の昭和55年、佐野市が栃の葉国体のバレーの会場になったことが契機となり、佐野市でもママさんバレーチームが起り、当時、旧佐野市だけでも48チームの登録がありました。ちょうどその頃、中学・高校時代バレー部に所属していた中村さんは、市P連主催の学校対抗のバレー大会に参加することがきっかけとなり、再びバレーに心を奪われました。

その後1市2町の合併に伴い、協会も一つになり今年度で10周年を迎えます。平成21年には協会として(財)栃木県体育協会からスポーツ顕彰を受賞しました。この受賞には、佐野市のチームが全国大会に4回出場していること、また県民スポーツ大会で中村さんの所属するチームが優勝したことなどが貢献したのではないのでしょうか。中村さんにとっても、『全国大会出場』という経験はかけがえのないものになっている、とのことでした。

佐野市は「スポーツ立市」を進めています。そのさきがけとして、



平成21年には、協会としてスポーツ顕彰を受賞しました。

※宝くじスポーツフェアの詳細は本紙12ページをご覧ください

オリンピックメダリストや世界大会出場選手を招き、※「宝くじスポーツフェア」(はつらつママさんバレーボール)を5月31日から2日間、市民体育館で開催します。これほどまでにバレーは佐野市を代表するスポーツとなっており、会員の皆様と協力してぜひ成功させたい事業のひとつということになります。

中村さんは、協会を先輩方が築き、指導してくださったことに感謝し、「登録チームはだいぶ減つてしまいました。次の世代に継ぐために、これからも皆さんが生涯スポーツとして楽しくバレーができる魅力ある協会にしていきたい」と抱負を語ってくれました。また「生涯現役選手としてプレーし、今まで以上に家族、仲間感謝の心を忘れず持ち続けたい」と話してくれました。

(市民記者 中里聖子)



譲るの方言はコスだった

親しい間柄で物を「売る」ことを、一般に共通語では「譲る」という語を用い、「米3キロバツカシ譲ってクンナカンベカー(くれないでしようか)」のようにいいます。また「分ける」を用いて、「米3キロバツカシ分けてクンネケー(くれませんか)」ともいいます。

かつて「売る」ということは、利益を目的とするので、知人同士ではこの言葉を蔑んで使いませんが、それが代わってやんわりと遠回しに言う「譲る」とか「分ける」を使いました。

同じように、知り合い同士の農民たちは「売る」を嫌って「コス」という方言を使いました。コスはお互いに現金収入の少ない相手の気持ちをおしはかつてつくれた方言で、売るともつかず、くれるとも貸すともつかない、実にあいまいな言葉です。金銭的に高価でなく、また、量的にも多くない物を譲るときに使います。コスはとどけるとか、渡すという意の古い言葉「遣す」が意味変化したものです。昭和20年頃までは、よく使っていました。今では一部の高齢者に限られています。

コスは単独で用いることがなく「米2升ほどコシテクンナカンベ(譲ってくれないでしようか)」「自家製の味噌がいいっていうから少しコシてヤンベ(譲ってやろう)」と思って「さ」のように、「くれる」「やる」などと結び付けていいます。(市民記者 森下喜一)

